

令和5年度 別府大学 学長諮問会議 議事録

日時：令和5年9月20日（水）13時～

場所：別府大学1号館21・22番教室

記録：豊田 恭子

開催趣旨

本学の教育、研究、社会貢献及び国際交流等に関する事項並びに本学の運営に関する事項について、学長の諮問に応じて、審議及び学長に対して助言を行う。

学長諮問会議委員（あいうえお順、敬称略）

安部 政信	別府市企画戦略部長
安藤 英俊	大分豊府中学校・高等学校長
石橋 伸之	社会福祉法人そよかぜ理事長(本学卒業生 人間関係学科 平成16年度卒)
西 謙二	別府商工会議所会頭
丸山 洋司	公立学校共済組合理事長(前文部科学審議官)
森田 展弘	大分みらい信用金庫理事長

学内参加者

友永 植	(別府大学学長)
田中 裕介	(文学研究科長)
樋園 和仁	(食物栄養科学研究科長)
西村 靖史	(文学部長)
木村 靖浩	(食物栄養科学部長)
高木 正史	(国際経営学部長)
針谷 武志	(学長補佐 教務担当)
岩本 貴光	(学長補佐 学生担当)
是永 逸郎	(学長補佐 就職担当)
仙波 和代	(学長補佐 入試担当)
山野 敬士	(国際言語・文化学科学科長)
上野 淳也	(史学・文化財学科学科長)
長尾 秀吉	(人間関係学科学科長)
平川 史子	(食物栄養学科学科長)
陶山 明子	(発酵食品学科学科長)
河合 研一	(国際経営学科学科長)
宇野 世史也	(大学事務局長・地域連携推進センター事務長)
安倍 武司	(短大事務局長・教務事務部部長)
工藤 公二	(学生事務部部長)

室谷 征一郎（教務課長）
佐藤 美己子（地域連携センター事務長補佐、教務課長補佐）
豊田 恭子（教務課主任）

計 28 名

（13：00）

冒頭に、安倍短大事務局長が学長諮問会議委員（以下委員）の出席の御礼を述べた。また、開催趣旨の説明および学内出席者及び委員の自己紹介を行った。その後、友永学長の司会（進行）のもと会議を進めた。

（進行：友永学長）

学長より御礼を述べた。また、本会議は、昨年度取り組んだ内容を議題とし、それらについて本学教員が説明した後、委員からの意見・評価をいただく形式で進行する旨の説明があった。

議題（諮問事項）

（はじめに）昨年度の学長諮問会議の議事録について（安倍短大事務局長）

安倍短大事務局長より昨年度の諮問会議について報告があった。昨年度の諮問会議の委員の先生方、学内参加者、議題があり学長を中心に説明をした。また、各委員から意見評価要望等を伺っており、かいつまんで説明があった。

辛島委員より、防災教育の取組とか地元の大学に進学をさせたいという希望の保護者に対してどのようにPRしていくか、さらにデジタル人材の育成の取組についてもご質問等があった。森田委員からはスクラップ&ビルド、それからコミュニケーション能力の向上ということについてご意見があった。佐藤委員からは今後の別府大学の在り方を考える時期にあるのではないかというご進言があった。松川委員からは、小学生においても大学生とふれあう機会が重要ではないかというご意見があった。

今年度も多くのご意見等を賜りたいと旨の依頼があった。

（1）別府大学の使命・目的及び教育目的について（友永学長）

友永学長より建学の精神・基本理念・使命・教育力の強化・教育の目的・使命について資料2に基づき説明があった。教育の質・授業内容・方法の改善、教養教育改善と専門教育改善、初年次教育の改善、修学指導の充実、国際化への対応、教職課程の充実について力を入れていること。高い専門能力と広い教養を備え、豊かな人間性と社会貢献への志を有する人材を養成すること及び学術文化社会の発展に寄与することを掲げ、中期計画では、基本的な教育方針を踏まえて、9つの重点項目のもとで教育、研究、地域貢献を実践している旨の報告があった。

特に、大学の最も大切な使命である教育については、教育の質保証を図るために、DP（デ

イプロマ・ポリシー)、CP (カリキュラム・ポリシー)、AP (アドミSSION・ポリシー) の 3 ポリシーを有機的に関係付けるとともに、それを担保するアセスメント・ポリシーの確立に努め、さらに PDCA サイクルを回して日々の教育改善を図っていると報告があった。

(2) 令和5年度自己点検評価(令和4年度実績)について(友永学長)

友永学長より資料3に基づいて説明があった。昨年度から中期計画の第3期に入っており、本学では9つの観点を設けて中期計画の実践を進めているとのことであった。

自己点検評価について学生や先生方の希望を取り入れ反映するべく尽力している。SDGs 達成への取組みを推進していると報告があった。

(3) 令和5年度事業計画について(友永学長)

友永学長より資料4に基づいて説明があった。教育力の強化・学生支援力の強化・就職力の強化・研究力の強化・地域力の強化・募集力の強化・マネジメント力の強化・持続可能な社会への貢献・看護学部の設置準備についてそれぞれ取り組みや強化内容を掲げた。

(4) 入学者の選抜の妥当性の検証について(友永学長)

友永学長より資料5に基づいて説明があった。アドミSSION・ポリシーについて、修学状況と入試制度について調査したものである。総合型選抜については退学者が5%超えたので今後の状況を分析していきたい旨の報告があった。

(5) 教学マネジメントについて(友永学長)

友永学長より資料6～8に基づいて説明があった。3学部6学科があり学科ごとに3ポリシーを作っており、ディプロマ・ポリシー、アドミSSION・ポリシーを学科の特徴を活かしたポリシーを作っている。アセスメント・ポリシーの実態はどうかを把握するため、いろんな角度から検証を行っている。ディプロマサプリメントについて4年間でどれだけ成長したのか確認し、就職等に生かしていきたいと思っている。学生による授業評価アンケートを基に授業を改善し、教職員の研修・資質の向上に努めている旨の報告があった。

(6) ICT教育(数理・データサイエンス・AI教育プログラム)について(西村文学部長)

西村文学部長より資料9-1は令和4年度に実施された情報リテラシー、数理データサイエンス入門という2つの科目の実施実績についてまとめたものと説明があった。

学生の単位取得状況について、令和4年度、令和3年度の履修者数、それから単位取得者数と単位取得率を記載している。それぞれの年度での入学者は新入生、それ以外とは2年生以上の学生の履修を意味しており、特に新入生では、授業を履修した学生のほぼ9割近くがきちんと履修を行っている旨の報告があった。

次に資料9-2は本学の数理データサイエンス、AI教育の概要について、現状と今後

ついてまとめているものと説明があった。資料1枚目では、文部科学省の数理データサイエンス AI 教育プログラム認定制度に対する本学の全学学生プログラムについての概略との説明であった。2枚目以降ではこの数理データサイエンス AI 教育プログラム認定制度応用基礎レベルの取得へ向けた選択科目の整備計画とのことであった。すでに令和4年度に開講しており、令和5年度に残る部分を開講する予定で、これらのプログラムを全学共通教育プログラムとして展開をしていく計画。中期計画との兼ね合いについて3枚目以降のような形で全学的に推進をしていく旨の報告があった。

(7) 学生満足度について (友永学長、岩本学長補佐 学生担当)

友永学長より資料10に基づいて説明があった。学生のユニバーサル化が進んでいる。学習者のキャンパスライフの支援について学生支援を推進している。

学生支援センターを来年度作るにあたり、点検評価会議は学生FDなどで学生の状況を汲み取り、学生の満足度調査を数年ごとに集計を行っている旨の報告があった。

岩本学長補佐学生担当よりとりまとめの報告があった。新型コロナウイルスが2020年の1月に日本で初めて発見されてから、それからしばらく学生生活がおくれてないという場面がありましたが、なんとかキャンパスライフも学生らしい生活がおくれるように戻るべく、こちらもいろんな対策を行いました。2021年にある程度学生たちがキャンパスの中に戻ってまいりましたので、その時点で今学生が困っていること、それから我々に望むこと、そういう生の意見をちゃんとしっかり聞いて、これからまたそういう場面に出くわした時にどういう対応を取ったらいいのか、さらにはこれからどういうことをやっていけばいいのかということ、学長をリーダーとして我々も一生懸命考えてやってまいりました。

調査を行った結果、コロナ渦でも学生と教員はよく連絡を取り合い親密で、すごく仲が良い関係が保たれているという意見が多く、教職員も一生懸命やりがいがある環境で指導させていただいていることが有難い。また学内の整備も学生の意見を聞きながら、よりよい学校生活が送れるように少しずつ改善している旨の報告があった。

(9) 地域連携について (友永学長)

友永学長より資料11に基づいて説明があった。地域連携、地方の大学として何ができるか、どのような貢献ができるかを考えている。大学が59%・短大が98%大分県内から入学しており県内の学生に入学していただき、付加価値を付け県内に就職していただく。地域連携プラットフォームに参加している。いろんな先生方が地域とかかわる行事を積極的に行っている旨の報告があった。

(10) 看護学部 (設置構想中) の設置について (友永学長)

友永学長より資料12に基づいて説明があった。令和7年度4月開設に向けて動いている。教員は27名決定している。順調にいけば来年の8月に認可があり、その後学生募集を

行うこととなっている旨の報告があった。

(14:00)

<休憩>

(14:15) 後半

委員より意見・評価・要望等を伺った。

(○=委員、●=学内出席者)

○今の入学定員の充足情報についての話がなかったと思いますが、どこかに資料がございますか？

●自己点検評価表(資料3)P41に今年の志願者数と入学定員等の資料があります。学生数関係ということで、入学定員の去年今年の受願者数、合格者数を学科ごとに表させていたでいます。

○基本的には定員は充足しているということでしょうか。

●学科によってばらつきがありますが、間違いありません。

○出生数について、私たちの頃は200万人ぐらい生まれていたわけですけど、いよいよ80万人を切り、18歳人口がかなり落ち込んでいる。これまでの大学の設置というのは一定のハードルを越えれば高等教育機関に進んでいくという流れであったが、これは18歳人口が伸びるということが前提でありました。全体の構造が非常に難しくなっているが、率直に言ってよくやられていると思う。非常に地方の大学の中でこのような数値がでているのは本当に努力を行っている証拠である。今後将来的な募集定員の関係、成長分野の育成について国や県、大学も考えていかないといけない。人材育成の意識をしながら大学の運営を考えていく必要がある。このあたりを大学全体としてどのように考えているのか。

●1950年に建学して50年間ぐらいはずっと文学部の単科大学でございました。世の中の状況の変化に応じて食物や国際経営を作っていました。どちらかというと文系が強く、食物は理系でも生活に関するところでもあります。ただ、今後生活科学の分野から理系の方に移していく可能性は十分にあります。今般の成長分野の支援を受けながら今看護学部を作りつつありますので、それが令和7年に一段落つきます。その辺りを目安にそちらへの転換を考えたらどうか、というようなことを少し話しております。数年前は情報の教員も育成していたが、あまりに少なく返上してしまいました。非常にもったいないことをしたと考えている。学部単独で申請できるのであれば、射程の中に考えていきたいと思っている。またもう一つはDX分野のデジタル人材の養成につきまして、これはまだ私の個人的な考え

でしかないのですが、国際経営学部がかつて45年前ですけれども、情報の教員を要請していたのですがそのときに非常に希望者も少なく、今からすると大変残念なことですけれども、情報の教員の養成課程を返上してしまったという経緯がございます。それで今後国際経営学部が先々生き残っていくためには、先ほどご指摘がありましたようなデジタル人材との兼ね合いを十分考えていかなければいけない。今回の補助金にその枠があるのですがよく拝見すると、大学院の拡充が前提になっていました。私ども大学院が今のところはございませんので、それが学部単独でもしそういう申請ができるようであれば我々も射程の中に入れて考えたいと思っていますところであります。来年の18歳人口が一番ガクンと落ちて再来年からまた今年の水準に戻るようです。4年程度の踊り場があって、それから徐々になだらかに減っていくという状況なので、なんとか来年度まで持ちこたえながらなだらかに下っていく間に今のような対応ができればいいかな、ということを考えているような状況でございます。

○学長の方向性が正しいと思うが、世の中の状況は非常に速いので連携を図りながら、行ってほしい。

また、地域連携の協定も地域と結んでいるが、大学として窓口があるのですか。

●窓口があり、地域連携センターがありますがそこですべてまとめることが難しい。学科や先生に直接依頼されることがある。中身を詰めていく必要がある。

○世間から別府大学は頼りにされると思う。

学生満足度調査について、非常に面白くおもった。学生目線が大事。上の文章とマイニングツールについて必ずしも一致しないところも面白いと思った。

○別府大学さんの方には高校の立場から、入試に関しても情報を的確にさせていただきますし、学校担当が高校によく来ていただき、詳しく教えていただいたりしています。それから卒業生の情報や就職情報なども教えていただけてありがたい。今度は在校生に進路を通じて卒業生のタイムリーな話題を教えることができ大変ありがたいと思った。

受験生の負担等ちょうどいいと思った。今度から共通テストに情報が入りましたが、入試にも情報が含まれていくのか聞かせてほしい。また、情報について、情報の免許が取れなくなったのが残念だと思った。また、入試科目になりますので高校でも情報の先生になりたい人が増えてくると思う。また、3年時でも情報を授業の中でやろうとするところもある。情報のニーズが高まってくると思うので、復活を願っている。

●私どもの日頃のお付き合いにつきましていろいろありがたいお言葉をいただきましたけ

れどもまず一つ、情報についてはどうするかというのは、私どもの入試委員会でも検討しているようですので、入試担当の学長補佐から、説明いたします。

●まず令和7年度からの入試に情報が入るということで、共通テストに関しましては、必須ではなくて選択で選べる体制を既に文部科学省に報告しております。本学の二次試験においては、選べる学科と選べない学科が若干あるのですけれども、一応選択ができるような体制の入試を既に文部科学省に報告しておりますので、一応取り入れる方向でホームページにも掲載しております。

●それからもう一つ、情報の教員養成課程の件です。これはもしそういったものをもう一回再構築するということになる、国際経営学部が一番近いのではないかと思いますけれども、高木学部長、その辺りの方向性はどうか。

●残念ながら現在は情報教員を育成できるカリキュラムはありませんが、現在のニーズにそって、もう一度検討し情報の教員を育成できるか検討課題とさせていただきたい。

○数年前に課程認定を返上したとのことでしたが、各県とも情報を教える先生がいなくて困っている。別府大学はチャンスであると思う。全国学力学習状況調査では今後はコンピュータベースになる。今でも OECD の PISA の調査なんかは、プリントアウトした資料に答えを書くわけではありません。要するに、コンピューターで画面を見ながら表を作って算式を求めて答えを導き出す。これが OECD の国際標準です。共通テストもそうになっていきます。国際標準がかわっていくので、データサイエンスは避けることができない。その方向性はしっかり進んでいますから、高等教育機関が変わってほしい。検討をお願いします。

●ありがとうございます。

○2点質問があります。1つ目は入学される高校生のアプローチについて、ニーズキャッチをどのようにしているのか。もう1つは学長の方から学科教育のブランディング化というようなお話が出ましたけれどもその点で、具体的な取組というのはもう初めていらっしゃるのかどうか教えていただきたい。

●高校のニーズをどういうふうに踏まえているかということですが、高校によりましてはニーズが様々で、私どもで大体県内につきましては、どの高校がどういうニーズを持っているのかというのは大体把握しております。最近は業者の絡んだ進路ガイダンスが行われている。ブランディングが行われている学校があるところとないところがある。県内で競り勝ち県外から本学に県境を越えて本学に入学してもらおうか、そこが一番重要だと考えている。

それぞれの学科によって特殊化がございますので、どの学科のどの部分を突けば、どのような方向性が出てくるかということを考えながらやっているというのが現状です。

○これから少子高齢化がさらに進みますので、ここでしか学べないもの、ここでしか体験できないものを増やして、いろいろな学部がありますので、連携を取りながらぜひとも進めさせていただきたいな、というふうに思っているところです。

●やっぱり地域のニーズをしっかりと把握しながらやっていくということが重要だろうと思います。県境をこして本学に入学してもらうのは難しい。要するに通学じゃなくて、生活費を支給してまで来てもらう、そのくらいのブランディングをやっていく必要があるかな、というふうに考えております。

○就職してくれた卒業生はしっかりやってくれているのでありがとうございます。今日ご案内の文書の中に宿題をいただいていたので、それについてペーパーを手元にお送りさせていただきました。「社会を生き抜くために必要となる力について一言」ということでご依頼を受けたのですけれども、明確な答えを持ちあわせておりませんので、最近の企業の潮流について情報提供をさせていただきたいというふうに思いまして、ペーパーを作らせていただきました。

現在ウェルビーイングを経営課題として重視する企業が増えております。ウェルビーイングは身体的、精神的、社会的に満たされた幸福な状態を意味するということで、なぜウェルビーイング経営を企業が目指すのかということで、2つ理由があると思っています。まず1つはウェルビーイングを感じている社員は非常に生産性、創造性が高いという調査結果が出ているということ。2つ目は先ほどお話がありましたが、人口減少、雇用の流動化が今後ますます厳しくなる中で、企業は優秀な人材を定着させたいということ。この2つです。これを高めるために4つの因子があると言われておりまして、これは前田先生が出したものですけれども、第1因子が「やってみよう！因子」、第2因子が「ありがとう！因子」、第3因子が「なんとかなる！因子」、第4因子が「ありのままに！因子」です。社員自身の努力も大切ですが限界があると、社員のウェルビーイングを高めるためには、企業は組織風土を見直したりコミュニケーションの質を向上させることなど、企業が主体となって4つの因子向上を働きかけていくことが今後重要になるということで、これをウェルビーイング経営というふうにご理解いただければと思います。別府大学様で毎年講義をさせていただいておりますけれども確か、第1回目の講義で学生の皆さんにこの4つの因子を大切にしてくださいようお話をさせていただいたと思います。ぜひ別府大学様におかれましても、学生の皆さんにこの4つの因子を意識して勉強に励んでいただくよう働きかけていただきたいと思います。卒業生の皆さんが社会に出て幸せに生きていくための大事な因子だと思っていますので、ぜひ、よろしくお願ひしたいと思っています。質問はございませ

ん。以上でございます。

●前回に引き続き、また貴重な意見をいただきましてありがとうございました。

○ヨーロッパと日本の違いはどこだろうと考えてみていたが、ヨーロッパは街並みを若者があるいており老人はほとんどいない。それと違い日本の別府の町並みは老人ばかり。本当に思い知らされました。

教育をする過程が大きくかかわっている。精神力の強さを要求したい。部活動やゼミなど集団活動に関わっている人が強い。ただ、保護者の育て方だと思う。学校は自信をもって送り出してほしい。

●大学のいわゆる知識だけでは社会ではやっていけない部分の必要性というのは私どもも十分感じております。若者があふれる別府にしていきたいと思っている。

●今年3月に卒業した学生は34名が別府に就職したと記録があります。今後も別府で学んで、別府に就職することを進めていきたい。これからもご協力お願いいたします。

●知識技能だけでなく、いわゆる非認知能力やコンピテンシーなど、そういった辺りの学生への教育を、大学のサークル活動とかそういったものを通して育成していくという方向性はどうか。

●今別府大学、明豊高校で一生懸命頑張って日本一を目指し育てていますが、その中で一番大事なのは人間を作るところで、その目標の中に日本一になるというところがある。剣道の技術がすごくてもそれだけでは勝てない。人間がピシッとしてくればやはり剣道の結果もおのずとついてくる。例えば人の目を見て挨拶をしましょうとか、下駄箱の靴を揃えましょうとか、本当初歩的なことですが、人として生きる部分をまずしっかりできなければ、これは学ぶということにつながっていかないかなというふうに思います。

●ありがとうございました。今回お集りの有識者の皆さん方の貴重なお時間をいただきありがとうございました。まずは深く御礼お申し上げます。今後とも今いただきましたご意見を十分私ども内部で深く協議いたしまして、取り入れるべきところは取り入れるという方向で進めたいと思いますが、本当に私どもの大学の特色をよく見ていただいて、そして温かいご提言をいただいたというふうに感じております。本当にどうも今日はありがとうございました。今後ともどうぞ、よろしく願いいたします。

(15時50分)

配布資料

- ・(資料1) 令和4年度 別府大学 学長諮問会議 議事録
- ・(資料2) 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等
- ・(資料3) 令和5年度自己点検評価書
- ・(資料4) 令和5年度 事業計画書
- ・(資料5) 2022年度在学生の修学状況と入試制度について
- ・(資料6) 別府大学 学士課程教育に関する3つのポリシー
- ・(資料7-1) 別府大学 アセスメント・ポリシー
- ・(資料7-2) ディプロマ・サプリメント
- ・(資料7-3) 学生による授業評価アンケート(報告)―集計結果および授業改善策―
- ・(資料8) 令和5年度 職員の研修(SD)の実施方針・計画について
- ・(資料9-1) 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム概要
- ・(資料9-2) 別府大学「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」に係る
自己点検・評価書
- ・(資料10) 令和3年度実施 学生満足度調査報告書
- ・(資料11) 地域連携・社会貢献資料集(令和4年度実施調査)
- ・(資料12) 看護学部看護学科【仮称】
- ・(参考資料①) 大学案内
- ・(参考資料②) Be-News